

GHE024-13

会場:301A

時間:5月22日 17:30-17:45

## 歴史科学は一括りにできるのか： タッカーの歴史科学哲学の適用可能性の検討 Is the category 'historical science' appropriate?: examining the applicability of Tucker's philosophy of historical science

伊勢田 哲治<sup>1\*</sup>, 大場裕一<sup>2</sup>  
Tetsuji Iseda<sup>1\*</sup>, Yuichi Oba<sup>2</sup>

<sup>1</sup> 京都大学, <sup>2</sup> 名古屋大学

<sup>1</sup> Kyoto University, <sup>2</sup> Nagoya University

科学哲学において歴史科学という分野は長らくあまり注目されてこなかったが、近年になってさまざまな研究が行われるようになってきた。その代表的な論者である Aviezer Tucker は著書 *Our Knowledge of the Past* (2004) で歴史科学に共通する方法論をベイズ的な観点から整理している。本発表では、タッカーの提案する方法論を紹介・吟味するとともに、タッカーの言うような形で「歴史科学」を一括りにすることでかえって見えにくくなるものがないか、という問題について検討する。

タッカーは「歴史科学」を、聖書批判学や比較言語学を源流とし、科学的歴史学や進化生物学なども含むようなカテゴリーだと考える。彼の考える歴史科学の本質は現在残されたさまざまな証拠を使って共通原因について研究するという研究手法であり、これには二つの段階がある。第一の段階が類似した証拠が偶然の一致ではなく共通の原因からの情報を保存しているということを示す段階、そして第二が共通の原因から結果までをつなぐ途中段階を再構成しさらに共通原因が持っていた特徴も推測できるようになる段階である。

タッカーはこの二つの段階での推論を尤度 (likelihood) の比較としてとらえる。第一段階ではさまざまな証拠が別の原因を持つという仮説と共通原因を持つという仮説の尤度が比較され、第二段階では途中段階や共通原因の持つ特徴についてのさまざまな仮説の尤度が比較される。

このような単純化した分析には、もちろん、これまで見えにくかったさまざまな領域の共通点に光を当てるといった利点がある。しかし、このようにまとめることでかえって見えにくくなるものがあるのではないか、というのがわれわれの問題意識である。具体的には、共通原因よりも共通原因からの系統関係に興味を持つ分野と、共通原因の側の出来事の連鎖 (歴史の流れ) に興味を持つ分野には方法論的差があるだろうし、進化生物学のように膨大な遺伝情報が利用できる分野と比較的少ない情報から過去を再構成しなくてはならない分野では単なる証拠の量にとどまらない質的な違いがあるかもしれない。

キーワード: 歴史科学, 科学哲学, ベイズ主義, 尤度, 共通原因, 進化生物学

Keywords: historical science, philosophy of science, Bayesianism, likelihood, common cause, evolutionary biology